

## 六月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

雪よ雪よ

森 重 香代子 山口

とり壊しし物置小屋の跡に降りうすらに白き今朝の粉雪  
藍染めの古き半纏とり出でて三日続きの雪に籠もれり  
雪よ雪よと呼ぶに応ふる声の無く窓を覆ひて降る牡丹雪  
わさわさと茂る葉群に伸び立ちし露の臺摘む裏庭に来て  
草抜くと踵<sup>よろほ</sup>踵ひし身はきさらぎの冷たき庭に臀<sup>おむ</sup>打ちにき

マスク時代

宮 里 信 輝 神奈川

引き出しの奥に使はず置くマスク長期政権替へたるマスク  
武骨なる中国製の布マスク配布不評で倒れし政権

引き出しに使はずに在るアベノマスク マスク時代の始めのマスク  
アベノマスクなどどわたしを呼ばないで素朴な中国製マスクです  
人類にマスク時代が始まりぬ何処へとゆくホモサピエンス

自肅の街

小山 富紀子 京都

コロナ禍に「甘楽<sup>かんらく</sup> 花子<sup>はなこ</sup>」閉店す伝統の技消えゆく四月  
茶席、茶会みな自肅にて茶道用生菓子<sup>じやうし</sup>は舞台失ひにけり  
〳初桜〳四月の薯蕷<sup>じやうとう</sup>最後とし「甘楽 花子」暖簾を下ろす  
この際と毛染めを止める人多し自肅の街は年老いてゆく  
父母が戦時を語り来しごとく語りゆくのかコロナ禍の京

あのをとこ

小嶋 一郎 佐賀

居間に置くセントポリアひと日だに陽に当たるなく白花咲かず  
大型のダンブが警笛鳴らし過ぐわれにはなく路面の鳩に  
料金の不足通知の箋を付しとどく速達またあのをとこ  
七十の教へ子が来て八十五のわれに聞くなり晩酌<sup>だちやく</sup>の量  
生り木責めするには嫩し植ゑてより八年を経し実無し<sup>みなし</sup>の檸檬

☆

☆



高野 公彦 千葉

ウィルス運ぶのは人 運び屋となりて街ゆけり用ありてゆけり  
若葉どき博物館は滅びたる恐竜の骨ありて深閑  
葬式の帰りのごとし信号待ちしてゐる人らみな無口にて  
若き日の春愁秋思 老いて今悠々自適いな五里霧中  
袋物その末裔のレジ袋下げて歩めり大き夕焼け

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

「馬上青年過」百歳をみづから祝ふ筆あとまどか  
ガス検針の仕事つづけて離婚後をひとりをのこ子育て上げしと  
検針に各戸をめぐりいためたる膝に手術の傷跡あかし  
痺れたるわが手首とり「細い手」とおどろき言へりリハビリの友  
傷み識るやうに目守れり窓ちかきさくら細枝に蕾吹くさま

杜 沢 光一郎 埼玉

奥村 晃 作\* 東京

左眼が見えなくなりて十数年。右眼も見えなくなればどうなる  
全盲になる日もやがては来るならむ家族にすがり生きてゆくのか  
頼りとする娘夫婦はゐるけれど二人とも勤め人 昼はどうするか  
白杖に地をコツコツと叩きつつホームを歩む人の記憶よみがへる  
駅ホームの盲人を導くイボイボを想起し不意の怯えを覚ゆ

武田 弘之 神奈川

日影 康子 富山

被災より十年の観測映像に復興遅き福島を見つ  
処理水と汚染水との違ひなど知らず安逸にゐし日々を恥づ  
原発が世にあるかぎり「2011.3.11」は永久の唱名<sup>ど</sup>  
ミヤンマーは何を血迷ふ軍隊が「デモ参加者を死ぬまで撃つ」と  
東京に再び五輪大会を迎へん老いのこころ華やぐ

黄の小花葉群はなぢの央なかにこぞり咲く椋南天の群落に來つ  
梅林の古木白加賀どれの木もヒトの都合に折り曲げられて  
力士らが四股踏む如く梅林の古木これより三役の姿なま  
梅林の梅一斉に咲き始め満開の木に寄り来て仰ぐ  
梅咲けど梅祭り無し新型のコロナウィルスに潰されて無し  
湧きたてる雲をまとひて残雪の劔岳するとき表情を見す  
ブロック塀へだてて今年も梅咲けり人の声せぬ隣家の庭に  
三月の蒼天ひろし大屋根の下にのこる雪 牛臥すかたち  
春の気配空にひしめき寺庭の白蓮、辛夷のつぼみ膨らむ  
夢のなか声を限りと人呼びて目覚めぬうつつに声挙げたりしや



古屋 祥子 群馬

この世にはもう亡き人と諦めし友より告げ来「わたし生きてる!」  
球磨の清流大洪水に侵されて今なほゴーストタウンのままと  
球磨川の周辺は移転 余儀なくて仮設住居への引越し間近か  
叔母上は娘に引き取られ自宅をば解体すとぞかなしき便り  
床下浸水に遇ひたる実家 九十五歳の母君のお元気が唯一の救ひと

影山 一男 千葉

フライングしたる桜か東京の開花宣言明日に控へて  
先駆けて咲ける桜は先駆けて散りてゆきたり春陽照る下  
うぶすなの青山墓地の花の道思ひて父恋ひ母を恋ふかな  
春彼岸詣でることも叶はざるわが家の墓われを待ちあむ  
良き声と思ひつつ聴く痛病みし桑田佳祐の「若い広場」を

桑原 正紀 東京

黝ずめる薬缶にはかに磨きたくなくなりて磨きぬ深夜の厨  
磨き粉をつけて磨きて二十分薬缶は銀の半球となる  
積もりぬし気鬱を共に擦り落とすがと銀のはたへを撫つる  
磨きたるばかりの薬缶うれしげに鳴り出でて白き湯気を噴き初む  
淫色のふかきコーヒー夜の灯を反して温し手の平のなか

狩野 一男 東京

散薬や水薬は無く、錠剤とカプセル剤のみわが飲みぐすり  
粉ぐすり苦きをオブラートに包み飲みし昔の懐かし恋し  
咲き進む桜の下で唄ひたしミッツ・マンングローブの「東京タワー」  
腕時計眼鏡シエーバーうちそろひ壊れてしまひ 桜見上げて  
さくら咲くりバーサイドを久我山へ歩きぬ若い二人みたいたい

岡崎 康行 新潟

貧しいとあなたが言つてはいけません窓口のをばさんに咎められたり  
年を得てテレビに見をりシベリアに仔に殉じたる母のバイソン  
ご近所の床屋の椅子によるこびぬ今日はわが鼻とほりがよくて  
要請を受けてゐる期間なのですよ当然でせうといふ声を聞く  
反対はしたいけれどもしなかつただから賛成らしく生きて来たんだ

小島 ゆかり 東京

いま発ちて頭上をゆける鴨の腹ふりあふぐときいのちは深し  
早春の空をましろの雲はゆきだれかの死後の時間はじまる  
里山のはうから暮れて対岸の人にはたぶんもう見えぬわれ  
揚げてすぐ食べるたらの芽立つたまま娘とふたり食べるたらの芽  
いろいろな感情かへりくるごとし雨のなかななる山茱萸のはな

木畑 紀子 京都

雨霽れてあけぼのすぎのそれぞれの秀で鳴く四羽のガラスサウンス  
濁声のからすとふふみ声の鳩よびあふならねこゑはなつかし  
へ云ひたいといふ火をそつと消壺に入れてふたたびコロナ禍の春  
しんしんと時はながれてゐるものをばかりと浮いたままの徒雲  
行くところ無く為すことの無きまひる莊子秋水篇をひろひ読む

島田 暉 神奈川

春早くくらみ初めし桃の芽のうすら赤きは真乙女ならむ  
野に畑に春の光を吸ひこみて大地母神のほほ笑みだせり  
やさしくて寂しがりやの白木蓮はくれんのスカートならむ春の霞は  
やは肌はの桃のとなりに置かれたる肌でこぼこの袖子そでがかがやく  
燃料の肉や野菜を食べつげる機関車ならむ男といふは

大松 達 知\* 東京

とんかつに添えられているひとこぶのキャベツ傷口だらけのキャベツ  
大切に生きんと思ふ大切はつつましさとはすこしへだたる  
悪いことを悪いと知らすむずかしさ(悪)の中の正いくつか  
教育とは火をつけることソクラテス言えりその火をわれは持つかや  
こんなふうにくいのか兄といふものはすこし強めに割った(平蔵)

田宮 朋子 新潟

客船の十一階に暮らすごと海を見ながら病やしなふ  
I G G 4 関連疾患などといふ怪しき病名耳になじみぬ  
夢想庵臥梅窟にてねむりゐる猫ウメおもふ病室の夜  
突堤にくだけて上がる波しぶき防風林の松より高し  
みづいろの小千谷縮をぢやちぢみをひろげたるごとくさざめく今朝の海原



津金 規雄 神奈川

水ぬるむゆるき流れの中にして鱧もつものら交歓のとき  
啓蟄の真昼間に飲むビール甘し酒菜は苦き追憶にして  
海とほき窓辺に春潮聴くおもひ微醺めいじゆんのなかに独り黙せば  
春の陽がかしらの霜を溶かすことなくて歩みき女子大キャンパス  
緯度越えて飛翔し来たり子育てする君らの体力そしてリビドー

清水 正子 神奈川

魔女狩りのころ消されしや古星図の猫は夜空のどこにもゐない  
星の座を迫はれしものを憐れむにカフェの猫たち眠つてばかり  
スルタンスルタンの膝のうへこそ相応はしも美猫ロシアンブルー古星図にゐき  
お八つ呉れる客を待ちゐるむ出掛けねば寄ることもなきカフェの猫たち  
ゆび体操すれば一番のろまなり猫が甘噛みしたる小指が

後藤 美子 北海道

マスク暮し長くなりたり眉のみをやや濃く引きて外出せんとす  
副作用と副反応の相違点わからぬままにワクチン遠し  
往きは歩き帰りは電車と決めて出づ春まだ冷たき風にむかひて  
用を足す道順少し変はりたり車手放しふた月を経ぬ  
役を終へたく直立つアマリス大ぎ四輪を支へぬし莖

福士りか 青森

美しき縁えにしを呑むころたつ中島みゆき「糸」を聴きつつ  
緩んではならぬ経糸たてせはしなく走る緯糸 いづれ女男なる  
緯糸がぷつりと切れて二十二年ほそぼそと張る父の経糸  
雪解けの水を容れたる春川のシンコペーション耳に明るし  
川べりを行けば離れて従ついて来るまだ灰色の残る白鳥



藤野 早苗 福岡

春隣地空きの柄の三毛猫が陽を浴む檀那寺の濡れ縁  
うつ伏せて眠りに入ればそれつきり目覚めの際に身を裏返す  
やや早き今年の桜の下に来て聞きをり娘の恋のてんまつ  
満開にちかき桜の五百重波吹き来る風に少しおくれ  
終はりたる花殻落としルピナスの錐状花穂空に伸びゆく

風間 博夫 千葉

百三十一億年前生まれたる光 宇宙望遠鏡のカメラ捕らへる  
百三十八億年前生れし宇宙、二十万年前にホモ・サピエンス  
直径が十キロの隕石衝突し恐竜絶滅 われら栄える  
「人間の小さな一歩」上空をいくたびか巡り目守りし月周回衛星  
加速度を持ちて膨張する宇宙ハッブル望遠鏡が関する

田中 愛子 埼玉

やはらかき風生まれぬん庭さきの草のあひだを猫とほりすぎ  
会へざれば笑顔ばかりが思はれて弥生のとほきいかつちを聞く  
うちあげは「学生時代」斉唱する地区短歌会の友よ会ひたし  
泣きながら生まれきたから泣きながら死んでゆくのだらうおそらくは  
主人公滅びはれやかな舞台なれりチャード三世はたドン・ジョヴァンニ

橘 芳 園 新潟

雪待つ子春待つ老いとなりたるはあつと言ふ間の出来ごととなりき  
いよいよにけものめきしか雪の山木の洞あればぬくもりて見ゆ  
死後の世があつても隣にわが席を空けて待つ人ゐるはずもなし  
思はでもよきを思ひて悩までもよきを悩みしわれと妻言ふ  
寺を出て普通のくらしせむと言ひし妻よ普通にくらすならずや

水上 比呂美 東京

靴下のかかとの穴をかがるとき針持つわれは昭和のお針子  
スライサーでキャベツの千切り作らむとキャベツ削りて親指削る  
親指の傷をやさしく包みたる母の手仕様の（キズパワーパッド）  
土足では入つて来ないペディキュアのままさき境界線を越えたり  
薬草は毒草となり思ほえず褒め殺しといふ勝ち方されぬ

鈴木 竹志 愛知

『赤光』の茂吉の歌を思ひをりわが母の命終いよよ近きに  
子や孫のことは幾何届かむや口は動けども声なきき母よ  
安らかにただ安らかに死せむこと祈るのみなり啓蟄の宵  
何ゆゑか茂吉の歌が浮かび来ぬ母の死の前母の死の後  
わが母が好みて舐めしコーヒー館買ふこともなしスーパリーヤオスズ

原 賀 櫻 子 東京

マンシオンをネットがおほひ蜜蜂の出入りに似たり人のあけくれ  
満月の63円夜ざくららの84円 夜ざくら貼りぬ  
体温計のケースが消えて三百たち仮死に出あひしごときさびし  
左手が不意にあなたの手となつて覚めぎはの朝右手をつかむ  
アラビアン・ナイトのやうな×が付き外壁修復工事はじまる

水上 美季 東京

時間軸ほのかに緩む週末にふる光る花水木の紅  
贈りもの贈りたい春多摩川の堤に白き浜だいこん咲く  
川の面が煌めく真ひる言ひ合ひをしてゐた二人が礫にゐたつけ  
まなうらに広き空ありはるにれが立ちて後ろを駆けてゆく雲  
春の夜のとどまる闇の声門にさみしさありて蝶が生まれる

大野 英子 福岡

ひとり置いて逝かれしものさびしさは仕事なければとりとめもなし  
しやがみ込み泣いてるわけではありませぬざくりとざくりと芝刈つてゐる  
枯れ芝を刈りゆく朝を匂ひたつ昨夜の雨に湿る土の香  
満開を過ぎたる梅の老木はわたしひとりにはなびら零す  
もつたれも世話する人の無さくらしシンビジウムの株増えてゆく

松尾 祥子 東京

雛の日をへさげもん見つつ柳川の御花に鰻のせい蒸し食む  
からたちの垣根の棘のつんつんと昼しづかなり矢留小学校  
桃咲いて柳の花の浮かぶ川 GONSHAN GONSHAN さん舟ゆく  
三月の汲水場へ下る石段に水陽炎のゆらめきやまず  
たまもかる沖ノ端なる水天宮 TONKA JOHN ふと出てくるやうな



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八―一〇六

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六―三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷二―一四―一六

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二―二四―四三